

葛飾区史編さんだより

261007

Vol.6

総務部 総務課 区史編さん担当係 03-5654-8444
郷土と天文の博物館 03-3838-1101

葛飾区



平成 26 年 9 月 6 日 (土) 午前 10 時から、高砂地区センターにて「昭和の葛飾を伺う会」が開催されました。かつての高砂・鎌倉・細田の方々が大勢お集まりになり、お話を聞かせていただきました。



爆弾池

昔の葛飾区は池が多かったという話をどこでも聞くことができます。高砂地区センターで行われた「葛飾区の昭和を伺う会」では爆弾池という話を聞きました。

この池は太平洋戦争時の空襲のときに出来たものとされています。細田では昭和 20 年 2 月 19 日に空襲があり、55 発の 500 キロ爆弾が投下され 3 名の犠牲者が出ました。このときに爆弾は田んぼや畑にも落ち、爆発した影響で窪地になって池が出来たというのです。

戦後はこの池を埋め立てて農地や宅地にする仕事を請け負う人もありました。高砂や奥戸の池や湿地埋め立てには東京都心から運ばれたゴミが使われたそうです。そのため一時期周辺の家に住む人はハエの異常発生に悩まされたこともありました。

このほか京成線の沿線にも池が多くありました。この池は線路を作るときに土盛りをする必要があり、土を得るために掘った穴が池になったそうです。

いずれも人工の池でしたがこれらの池にはいつの間にか魚も住みついて、近所の人たちが四つ手網などで魚とりをするのが楽しみでした。

新中川

新中川、中川放水路は東京の下町を洪水から守るために開削された水路です。昭和 13 年に計画が立案開始されましたが太平洋戦争の影響で工事が遅れ、本格的に着工したのは昭和 24 年になってからでした。高砂から江戸川区の今井水門まで総延長 8089 メートルあります。

この工事を見ていた人たちの話によると、大きなプールのようなものを作って、つないでいくという工事の方法でした。このプールの水はあまりきれいではありませんでしたが子供たちはそこで泳いで遊んだものだそうです。

この新中川の工事に参加したのは埼玉県東南部の稲作農村の人たちが多く、寝泊まりする施設を作ってはそこで仲間同士で共同炊飯して工事に従事しました。

新中川の開削によって移転を余儀なくされた家もありました。また上下之割用水からの枝用水が田んぼに届かなくなり、それを機会に稲作をやめた家も少なくありませんでした。



曼荼羅コカブ・曼荼羅ワケギ

曼荼羅とは鎌倉町の古い呼び名です。

市場などでは鎌倉というより曼荼羅というほうが通りがよくて、鎌倉町の農家が作る特産のコカブは「曼荼羅コカブ」と呼ばれていました。コカブは金町コカブがのちに知られるようになりましたが、鎌倉町のコカブは品質の良いことで有名でした。近隣の集落の農家でも、「四月になって、曼荼羅のコカブが市場に出てきたら、うちの村ではカブを売るのがあきらめた」といいます。

昭和 30 年代になるとワケギが高値を呼び、柴又や鎌倉町の農家で競い合って作られました。やはり「曼荼羅ワケギ」という通り名で売られました。市場に出すワケギは独特のマルキ方(梱包方法)があり、その良し悪しも市場での売値に反映されました。

高砂 1 丁目

現在の高砂 1 丁目は諏訪町といいました。諏訪町は江戸時代は諏訪野といって、新宿町の飛地の集落でした。昭和初期この諏訪町には 16 軒の家しかなかったそうです。わずか 16 軒しかない集落にもかかわらず、八幡神社があり、阿弥陀堂があり、定期的に念仏が行われていました。大正時代以前は土葬で、墓穴を掘ったり棺を担いだりする役割もこの 16 軒が交代で行っていました。小さいながらも村としての機能がしっかりとしていたことがわかります。

諏訪町の阿弥陀堂は、江戸時代諸国を放浪していた六部(ろくぶ。正しくは六十六部。全国を巡回して六十六巻の法華経を奉納する修行をしている僧侶。またはそれを模して各地を放浪していた旅の僧侶のこと)が諏訪野の地にたどりつき、守(もり)を務めるようになったと伝えられています。この阿弥陀堂に絵馬を奉納することによってお乳の出ない女性が苦しみから解放される功德があるともいわれ、境内には多くの奉納絵馬がありました。本尊として阿弥陀如来の木造が安置されています。

かつての諏訪町の集落は八幡神社の付近に家が集まっていたそのほかは田畑が広がっていました。隣接する中川は享保時代に工事が行われ、流路の付け替えが行われました。その結果かつては中川の対岸だった高砂、淡野須の土地が地続きとなりました。また新中川が開削されたのちは、かつての細田の一部も高砂 1 丁目に組み入れられました。



細田の旧家

細田の旧家杉浦家は三河の出身で徳川家の家臣であるという由来が伝えられています。徳川家康が江戸に入府したのに従って細田の地に赴き、土着したという家の由来を伝えています。細田は、曲金(現在の高砂)の新田として江戸時代開発され、元禄年間に村として独立したと考えられています。細田の旧家杉浦氏や石井氏、月村氏らがこうした村の開発にどのような関わりを持ったのかは現段階ではよくわかりません。また細田の開拓者といわれる細田氏の子孫が現在細田の地にいないことも謎のひとつです。

現在も愛知県三河地方に杉浦姓は多く、愛知県の姓名ランキングでは杉浦姓は 12 位という高位にあります。愛知県・静岡県で全国の杉浦姓の 5 割を超えるといわれ、とくに碧南市ではもっとも多い姓が杉浦氏です。

鼎(かなえ)小学校

明治 19 年、学校令が布告され、近代学校制度のもと各地に尋常小学校が設立されました。これにともなって高砂、細田、鎌倉の地にも細田小学校、曲金小学校、鎌倉小学校が設けられました。これらの学校は明治 22 年には合併して鼎小学校という名称の学校が細田の地に設けられました。「鼎」の意味は高砂、細田、鎌倉という三つの村の共同で設立された学校という意味です。鼎小学校は明治 36 年に奥戸の徳修学校と合併して奥戸尋常小学校が開校するまで存在しました。